

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第7号(令和6年12月9日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



ボランティアの意義

先日、島内のあるスーパーの社長さんが来校され、先月の記録的な豪雨災害で被害を受けた店舗の復旧作業に本校生徒がボランティアとして参加したことに對し、感謝のお言葉を頂戴しました。また、本校生のボランティアの様子を報道で知った島外の高校の校長先生や教育関係者からも多くの賞賛の言葉を頂きました。被害状況が明らかになるにつれ、本校生が何か力になれることはないかと、教頭先生と相談している矢先に、既に生徒の皆さんが行動に移していたので、感心すると同時に校長として誇らしくも思いました。10月の全校朝礼で私が話した「人間力偏差値」とはまさにこのような力を指すのです。今回、ボランティアに参加した生徒の皆さんは、困っている人に対する共感力、即実行できる行動力、チームで行動できる協調性などの項目で「人間力偏差値」を大きく伸ばしました。本校では、町の体育大会やヨロンマラソンなど、団体としてボランティアに参加する機会がありますが、今後はそれら以外でもあらゆる機会を自ら見つけて、人や地域社会のためになる行動を続けてほしいと思います。



ボランティアという概念が根付いてまだ日が浅い日本は欧米などの外国と比べると、ボランティア活動に対する意識が少し違うようです。日本ではボランティアというとは何か普段とは違った特別なことをするという感覚があるかもしれませんが、欧米では普段の生活の中に当たり前に存在するものと認識されているようです。

例えばアメリカは、建国以来、ボランティア精神・ボランティア活動を国の基礎として重要視してきました。法律によって、全てのアメリカ人

に、国家あるいはコミュニティへのサービスの実践を通じて、アメリカ社会に貢献する機会を保証しています。ボランティア活動に、統一した定義はありませんが、一般的に個人が自発的に行う活動であり、無償で、他者や社会のための活動を意味します。

アメリカには、地域コミュニティへの参加・貢献の方法として、コミュニティ・サービスというものがあり、「アメリカ社会全体が直面している社会福祉、教育、環境、治安等の緊急の課題に對して、全ての年齢の国民が協力して取り組むこと」として定義されているのです。

このコミュニティ・サービスと学校や大学の教育課程をつなげて、コミュニティと学生の両方が向上することを目指すサービス・ラーニング(Service Learning)も重要視されています。サービス・ラーニングの定義には、全米的に合意されているものではありませんが、共通するのは、「教育課程とコミュニティ・サービスの組み合わせ」だということであり、生徒や学生の側からみると「市民として必要な知識や技術を習得する市民教育」を受ける機会であり、学校側からみると「教科の指導方法を現実社会に適応させること」となります。学校で学んで身につけた力や試したい能力を、サービス・ラーニングを通して地域に還元していき、そこで経験したことを学校での次の学びに活かしていくという、ウィン・ウィン(Win-Win)の関係が既に成り立っているのです。



ある調査では、2004年に正式な組織を通じて(あるいはその組織のために)ボランティア活動を行った青少年(12~18歳)は55%、つまり2人に1人以上いたそうです。また、学業の成績との関連を聞いた設問では、GPA(Grade Point Average: 欧米の高校や大学などで一般的に使われている成績評価の指標)レ

ベルが高いほど、ボランティア活動に参加しており、しかも定期的に参加している青少年の割合が高くなっています。

また、大学においては、サービス・ラーニングを卒業要件にしていたり、選択科目や専門科目の一部に取り入れたり、大学を挙げて取り組んでいるところもあるようです。

これらのことから、アメリカではボランティア活動がいかに関係する青少年に好影響を与えているか、また、日常から当然することだと認識されているかがわかると思います。与論高校生もそんな感覚で、当たり前のようにボランティア活動に参加して自分を磨き、その経験を学校の勉強につなげていけば、自分の希望する進路に大きく近づけるきっかけになると思います。特に3年生は、高校時代に島内でできるボランティアは3月までです。アシスタント・ティーチャーなどで、与論の後輩たちへの、18年間の学びの還元も積極的にできる卒業生であってほしいと思います。

(アメリカにおけるボランティアに関する記述は、文部科学省「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究 報告書 平成19年3月」を基にしました)

1人でもできるボランティア

前任校の教頭時代、外部の一般の方から電話を頂き、嬉しい思いをしたことが2回ありました。

1回目は、「そちらの高校の男子生徒さんが、毎朝登校中にゴミ拾い用のハサミとポリ袋を持ってゴミ拾いをしている。感心なことなので褒めておいて頂きたい」という内容でした。確認したところ、この男子生徒は野球部で、自分専用のゴミ拾い用のハサミを常時携帯し、このゴミ拾いをずっと続けていると

いいです。拾ったゴミも学校で捨てるのではなく、自宅まで持ち帰るという徹底ぶりでした。

2回目は夏期休業中の猛暑日のことでした。「そちらの高校の女子生徒さんが、住宅街のゴミ収集場所で、カラスや猫が生ゴミを食い荒らして、周辺の道路まで散乱しているゴミをきれいに片付け直し、道路の清掃までしてくれた。あまりにも感動したので、電話せずにはいられませんでした」という電話でし



た。この方の話によると、この女子生徒は学校に行くのか、近くのバス停に向かう途中、最初は制服姿だったそうです。しかし、ゴミ収集所の状況を見て、いったん家に戻り、汚れてもいい服装に着替え、汗だくになりながら掃除をしていたということです。

この2本の電話を受けたとき、私はただただ感動し、清々しい気持ちになりました。高校生が何の見返りを求めることなく、今自分にできることを愚直に、かつ、必死にやる姿に大人は心を打たれるわけです。汚れている場所をきれいにしようという純粋な心を持った高校生の行動により、その地域の環境が保たれ、人々の心も洗われる。まさにこれも立派なボランティア活動だと思います。

「お天道様は見ている」

この2人の生徒の行動に関して私が最も感銘を受けたのは、彼らの何気ない行動に、周囲の人が心を大きく動かし、学校とは何の関係も持っていない人たちなのに、わざわざ電話番号を調べてまで電話をかけさせるだけのパワーがあったということなのです。彼らの行動は、確実に周囲の人に変化を生じさせています。その変化がめぐり巡って、本人たちは意図してなくても最後には本人たちにとって大きな利益となって帰ってくるかもしれない。そんな気持ちにもなるのです。

「お天道様が見ているよ。」この言葉は、たとえ誰も見ていなくても、天の神様が見ているから、陰でこそこそ悪いことをしてはいけない、そんなことをしたらバチが当たるよと、子どもを諷める言葉として私の子どもの頃はよく耳にしていました(最近あまり聞きませんが)。でも、いい行いについても同じことが言えるのではないかと思います。

彼らの行動を見て感動し、学校に電話してきた人が、偶然彼らが数年後受験した大学の面接試験の試験官だったとか、彼らが就職を希望する企業の役員だった、というようなことが起こらないとも限らないのです。人が見ていないと思えるようなところで、見返りを求めずやっているような行動も、きちんと「お天道様は見えてくれる」と信じながら、人のため、地域のためになるような行動を行える与論高校生になってほしいと願っています。